

大学生における理想自己の志向性と学生生活 QOL の関連について

高橋紀子

(九州大学大学院人間環境学府)

Keyword:理想自己の志向性、大学生、学生生活 QOL

I 問題と目的

理想自己の高さは自己否定を強める一方で、自己形成意識(水間,1998)やその具体性(Emmons,1989)によっては成長の指針にもなることが指摘されている。このような理想自己の様相は、自己の不確実な青年期の場合様々なものであるだろう。

また、“留年”や“アパシー”といった青年期の適応問題は、自己を見つめる際生じる混乱との関係が指摘される(溝上,2001)一方で、自己存在が否定的でありながらも社会的生活では適応する青年を我々は少なからず見ることができる。

自己が形成過程にある青年期に対して、単純な比例関係ではないとされる自己に対する混乱と社会的生活との関連を検討するうえで、個人における理想自己の様相

-すなわち理想自己が個人にとって何を志向するものとして形成され、どのように位置づけられているのかといった点-を考慮する必要があるだろう。

そこで本研究では、理想自己の様相と社会的生活との関連を検討することを目的とする。この理想自己の様相を検討する視点として個人における理想自己の志向性(理想自己を形成する際に志向されるもの、基盤)に注目する。

II 方法

調査時期:2001年11月下旬

対象:大学生404名(男性234名、女性170名)、平均年齢19歳(18~29歳、SD=1.18)

質問紙構成:

(1)理想自己志向性尺度(2)自意識尺度(菅原,1984)(3)学生生活チェックリスト45(福盛,2001)

III 結果

3. 理想自己志向性尺度の作成と信頼性、妥当性の検討

(1)予備調査

(2)因子分析 予備調査に基づいて作成した尺度素案を実施し分析を行った。

Table1. 理想自己志向性尺度の因子分析結果

第1因子 理想的他者志向 ($\alpha=0.90$)	F1	F2	F3	h ²
12. 「いいなあ」と思う人は、自分のお手本にしたい	.819	.206	.067	.718
3. 人のいいところは、自分も真似したい	.811	.099	.035	.669
4. 「いいなあ」と思う人の行動を自分もできるようにになりたい	.802	.155	.154	.691
9. 人のいいところを実感すると、自分もそうなりたくなる	.790	.196	.132	.680
13. 人のいいところを取り入れていきたい	.773	.275	.118	.688
17. 人の良い行動を見聞きすると、自分もそうできるようになりたくなる	.677	.413	.107	.640
第2因子 社会的価値志向 ($\alpha=0.77$)				
15. 社会(まわりの人達)の中での自分の果たすべき役割をまっとうしたい	.114	.743	.213	.610
5. まわりの人達の期待には応えたい	.250	.622	.111	.462
2. できるだけ多くの人から受け入れられたい	.293	.613	.066	.484
7. できるだけ多くの人から「つきあいやすい人」だと思われたい	.308	.593	-.080	.453
11. まわりの人達とうまくやっていくことは、充実した人生につながる	.119	.529	.086	.295
第3因子 現実自己基帯 ($\alpha=0.87$)				
18. 自分らしく生きたい	-.028	.189	.823	.718
10. 私には私なりの人生があっていい	.018	.141	.743	.573
1. 自分の個性を大切にしたい	.149	.056	.736	.567
6. 自分なりの価値観を持ちたい	.308	.017	.699	.584

累積寄与率

58.883

主成分分析による因子分析を行い3因子を採用した (Table1)。第1因子は理想化された他者の特性を志向する「理想的他者志向」因子、第2因子は社会に適応する上で有効と予測される特性を志向する「社会的価値志向」因子、第3因子は自分の特性を活かそうとする「自己基盤志向」因子と命名した。

(3)信頼性 各因子の信頼性係数 (Cronbachの α 係数) は0.77~0.90だった。

(4)妥当性 構成概念妥当性を検討するために自意識 (公的自意識・私的自意識) との相関係数を求め、各志向性の特徴を検討した (Table2)。

Table2 理想自己志向性尺度と自意識尺度因子の相関

	公的自意識	私的自意識
理想的他者志向	.454**	.264**
社会的価値志向	.448**	.131**
自己基盤志向	.196**	.310**

**: $p<.005$

2. 理想自己志向性のタイプ分類

理想自己志向性尺度の3因子の標準化された得点を変量としたワード法によるクラスター分析を行い、4タイプに分類した (Fig.1)。

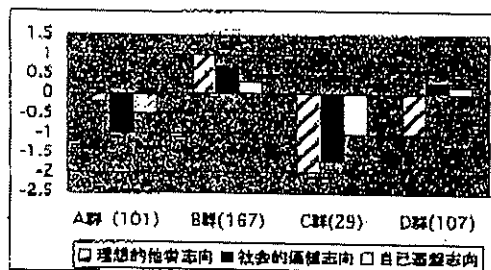


Fig.1 クラスター分析結果

3. 理想自己志向性タイプと学生生活 QOL との関連

理想自己志向性タイプごとに大学生生活チェックリスト 45 の下位尺度の得点を算出した。一要因分散分析を実施後、Tukey 法による多重比較を行った (Table3)。

学校内環境において D 群は A 群・C 群より有意に得点が高かった ($p<.005$)。また社会的関係において B 群は A 群・C 群より、また B 群は A 群より有意に得点が高かった ($p<.005$)。全体的充実感において B

群・D 群は A 群より有意に高かった ($p<.005$)。

Table3 各群の学生生活 QOL 得点の平均と標準偏差

	A群	B群	C群	D群	
生活環境	2.43 (1.37)	2.58 (1.21)	3.37 (1.08)	3.71 (3.72)	D>A・C
学校環境	1.75 (0.96)	2.04 (0.92)	1.58 (0.87)	2.16 (0.87)	
知的成長	2.01 (0.94)	2.20 (0.88)	1.90 (0.94)	2.18 (0.86)	
心身不調	5.49 (1.85)	5.33 (1.77)	5.21 (1.72)	5.37 (1.63)	B・D>C
社会関係	3.34 (1.61)	3.97 (1.39)	3.07 (1.56)	3.88 (1.48)	
未来展望	2.87 (1.82)	2.97 (1.73)	3.07 (1.65)	3.88 (1.72)	B>A
自己効力	4.27 (1.20)	4.52 (1.98)	4.10 (2.16)	4.85 (1.97)	
全体的充実感	2.57 (1.63)	3.24 (1.63)	2.72 (1.58)	3.56 (1.50)	B・D>A

IV 考察

1. 理想自己志向性の特徴

本研究では理想自己の様相として①理想的他者志向②社会的価値志向③自己基盤志向の3つの志向性を取り上げた。自意識との関連から、理想的他者志向は自意識の内的基準と外的基準の両方が考慮されるものであるのに対して、社会的価値志向と自己基盤志向は内外どちらかの基準によるものであることが示唆された。

また、この3つの理想自己志向性は個人内において何程度にあるのではなく、個人内でその程度に差があることが示された。

2. 理想自己志向性タイプと学生生活 QOL の関連

また、この理想自己志向性のバランスは、学生生活での①学校内の環境②社会的関係③全体的充実感においてその QOL に有意な差があることが見いだされた。また結果より、理想自己志向性のひとつが学生生活の QOL と関連を持つのではなく、3つの志向性のバランスによって学生生活の QOL の特徴が見いだされることが示唆された。

3. 今後の展望

今回検討した理想自己の志向性が理想自己の様相を測る視点としてどれほど有用であるのか、今後検討を重ねる必要があるだろう。また、この理想自己志向性のバランスがどの程度流動的なものなのか縦断的に検討を重ねることも必要であろう。